

# 巻頭言

## 「古井由吉が聞いた寺の鐘」

理事長 新谷友良

2月28日の新聞に、古井由吉が82歳で亡くなった記事が載りました。新聞には「内向の世代」を代表する作家、と紹介されています。大学を出た直ぐの頃、「杏子」で芥川賞を受賞したので気にはなっていましたが、なかなか食指が動かず、読み始めたのは50歳を過ぎてからになりました。

彼の作品に「鐘の渡り」という短編があります。「山からおろす時雨の寄せるその奥に澄んだ鐘の音がふくらんで、風に乗って谷から野へ渡り、つれて眠りも遠くまで運ばれて」、3年ばかり同棲した女性の四十九日を済ませた友人と、ずるずると女性との交際が続く主人公が1泊の山行をして、宿で明け方の山の上から聞こえてくるお寺の鐘の音を聞く書き出しです。

以前、村上春樹の「めくらやなぎと、眠る女」が、耳を病んだ少年の苦痛を「ふと気がつくとな、まるで音がきこえなくなっているんだよ。耳栓をして深い海の底にいるみたいにさ。」と表現していることを紹介しましたが、「鐘の渡り」は、聞こえを通じた二人の心の動きを「朝倉のつぶやきが隣でまどろむ自分の内に鐘の音を想わせ、余韻の影を追いきれなくなり、目をさました自分の声が朝倉の内に幻聴ながらおそろくくつきりとした、鐘の音を響かせた。」と表現しています。

二人の作家の文体の違いは大変興味がありますが、視覚や聴覚などの五感でとらえた楽しいことや辛いことを、作家はリアリティを以って伝えるために言葉を選びます。その言葉は、作家が望む通り、あるいはそれ以上に、あるいはそれ以下に、楽しいことや辛いことを読者に伝えていきます。自分が聞こえないからでしょう、その中で作家が聴覚でとらえた思いを言葉にしている部分はとくに気になります。「耳栓をして深い海の底にいる」、「時雨の寄せるその奥に澄んだ鐘の音がふくらんで」といった文章を読むと、聞こえないことの痛みや鐘が響かず寂寥が耳に聞こえてきます。

「帳場に寄って中にいた年寄りに、この山の上の寺の鐘は誰が撞くのかとたずねると、鐘ですって、そんなものはありやしません、とたちどころに答えが返ってきた。」と書かれていて、寺の鐘の音は山行きを共にした二人の耳に届いた共同の幻聴であり、それぞれの生活に抜き差しならず起こった出来事が、鐘の音となって二人の間に行きかけたことの結果であることは間違いのないと思えます。